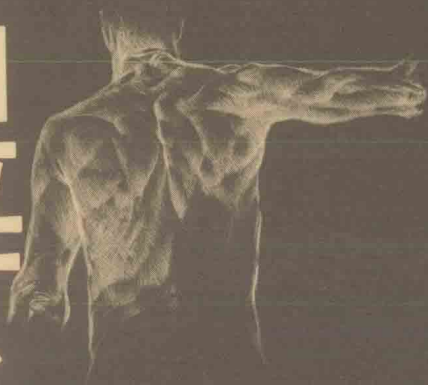


小田実



自立する市民

自立する市民 小田実



朝日新聞社

自立する市民

定価 900円

著者 小田 実

発行者 朝日新聞社 岡見 璋

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 東京：丸の内 朝日新聞社
大阪：北九州

1974年6月30日 第1刷

はじめに

わが友、宇井純に言わせると、東京で沈黙考していると、日本の未来、世界の行く末、いや、そんな言い方をするより、人びとのこれから（人びとなくして、何の日本、何の世界ぞやと言いたい。そここのところを、自分の考えの基本におきたい。そして、「未来」とか「行く末」とか言うより、「これから」というぐあいにあつさりと考えたい。「未来」というと、何やら、大げさすぎる。またぞろ、未来論者のネゴトじみた思考になつて来る。「行く末」というと、はやりの「終末論」——甘たらいそれになつて来るおそれがある。「これから」はまさに「これから」であつて、これからの私たちのありようであつて、そこから出て来ることは、これからどうするかという次の具体的な行為への思念であり、^{こころざし}志である。それら以外ではない）——みんな、それぞれに絶望の感じがして来る。そういうときは、彼は旅に出かける。旅に出かけると言つても、サクラの花をめでに出かけるといふのではない。うち見たところ、宇井さんはどんなときでもそういう心のたのしみを失わない人と見えたが、彼はまず人に会う。人びとに会う。公害反対闘争の渦中にいる、いや、その渦巻を自分でつくり出して、自らそのなかにいる人びとに会う。サクラの花をめですることはあつても、宇井さんは彼らとともに

に見に出かける人なのだろう。そして、もちろん、彼は彼らとともに飲む。

そうすると、元氣が出て来るというのである。絶望しなくなるといふのである。いや、もちろん、酒を飲んで、たべることで元氣が出るのではない。彼らとともに工場のまえに坐り込んだり、デモ行進に出かけることで元氣が出る。

私もまた同じ思いをもつ。あるいは、同じ性へきをもつと言ってもよい。私がこの「自立する市民」という企画を考え、実際に『アサヒグラフ』の誌上をかりて行ない出したのには、「自立する市民」おたがいのつながりをつくり出す、すくなくともその結びつきの手助けをするという大目的のほかに、自分へのはげましという意味あいもあった。ときは六九年から七〇年——と言えば、すでにお判りなのにちがいないが、日米安保条約をつぶそうとする人びとの動きがそれをあくまでもちつづけようとする権力とまっこうからぶつかりあったときで、そこへもって来て、「自己否定」ということばで象徴される学生運動——「全共闘」運動が日本中にひろがっていたときだった。前者の人びとの動きと、後者の学生たちの運動のひろがりとは部分部分ではマサツを起しながらも基本的なところでは入りまじり、おたがいにはげまし、刺戟し、増フクしあいながら、そのころ私が好んで使ったことばをもう一度ここで使って言うなら、大きな「人間の渦巻」を日本中につくり出した——そのとき、私は、その「人間の渦巻」を、いわば、実地検証する旅に出かけた。その記録が、この「自立する市民」という本なのである。

「自立する市民」とは何か。一口に言うなら、それは、自分のことは自分で定める、それゆえに、自分の足で立つことで自分の運命をえらびとろうとする人間のことだろう。私は、「市民」の歴史的、哲学的定義には何の興味もない。私が興味をもつのは運動的な定義で、その定義とは、つまり、そうした人間が市民だということだ。ことばをかえて言えば、「自立する」ということばと「市民」ということばは分かちがたいことばで、自立しない人間は「市民」ではない。

こんなふうに考えれば、私の言う「市民」のなかに、たとえば、農民がいてもふしぎはないだろう。もちろん、労働者がいても、何のふしぎもない。あるいは、学生もいれば、それこそ、家庭の主婦もいる。私がこの「自立する市民」の実地検証の旅で求めたことのひとつは、学生たちが政治集会などでよく口にする、「ここに結集した労働者、学生、市民」というような言い方のなかにある、「市民」だけを特別に分かつようなやり方をやめることであつた。そうしたことばを耳にするたびに私がおもひ浮べたのは、それでは、労働者、学生は「市民」ではないのかという素朴な疑問で、私の「市民」の定義がさきのようなものである以上、その疑問は痛切な疑問であつた。

さて、「人間の渦巻」とは、もはや、あらためて述べなおすすめでもないことだろうが、「自立する市民」の渦巻であつた。「自立する市民」の実地検証をするということは、とりもなおさず、「人間の渦巻」の実地検証の旅に出かけることであつた。

その実地検証の旅を、私は一回きり行なつたのではない。第一、そんなことは、この本の中身がよく示しているように「人間の渦巻」は日本中にひろがっていたゆえに、不可能だった。それに、私自

身が「渦巻」の一部をかたちづくっていたから、長時間、旅に出かけることはできなかった。何回にもわけ、手まめに私は出かけたのだが、そのうちの何日かは、そのころ、私と私の「ベ平連」（「ベトナムに平和を！」市民連合）の仲間たちがぐりひろげていた「全国縦断反戦集会旅行」とかわるかたちで行なわれた。一口に言ってしまうえば、これは、「人間の渦巻」を自分をふくめて日本中につくり出して行く企てだった。「デモで日本をまわろう」——企てのひとつのスローガンはそれだった。そして、文字通り、私たちはデモで日本をまわったのだが、そうしながら、私は「自立する市民」と各地で会った。もちろん、各地のデモ行進のなかでも、彼らに会った。

何のために会ったのか。

もちろん、さきにも少しふれたように、私は「自立する市民」たちのつながりをつくり出したかった。いや、つながりは自分の手でつくり出すものだ——ただ、その手助けをしようと思った。「自分で自分のことをきめる、自分の足で立つ」から「自分たちで自分たちのことをきめる、自分たちの足で立つ」に至るとき、「人間の渦巻」は真の力となる。いや、そんなふうに考え始めたのは、実際に「自立する市民」にひとりひとり会い始めたあとのことだ。それよりは、正直に言うなら、まず、私は自分のために実地検証の旅に出かけた。

一口に言えば、私は、まず、面通しをしたかったのである。「ベ平連」の運動を始めて数年が経っていて、私はその数年間の体験のなかで、おたがいがおたがいを知っていることが実は運動のカナメであることをからだで感じとっていたのである。「ベ平連」はひとつのイデオロギーによってかたち

づくられた運動ではなかった。あるいは、強固な組織をもつ運動ではなかった。それは、ほんとうのところ、ベトナムの人びとの「自立する市民」としてのたまたかに共感し、彼らの「自立する」意志を叩きつぶそうとするアメリカ合州国、そして、それに協力する日本の政府のやり方にまっこうから反対する「人間の渦巻」だった。こういう「渦巻」にあつて、大事なことは、おたがいがおたがいを知っていて、人間的な共感を通わせることだ——それを私は数年間の「ベ平連」運動の体験のなかで体得していて、それで、私は、いわば、「自立する市民」の面通しの旅に出かけた。

おたがいがおたがいを知することは、私にはげましをあたえることだった。そのことも、私は正直に書いておきたい。私は心弱い、ともすれば意気ソソウしがちになるふつうの人間で、こうしたふつうの人間にとつてもっともはげましになるのは、おとなりのふつうの人間がふつうの人間なりの姿でデモ行進に出かけるのを見ることだろう。あ、あいつもやっているな。私は思う。そして、おれもやるな。そんなふうに私は思い、歩き出す。

その事情は、この本のなかの「自立する市民」たちにとつても同じではなかったかと思う。「自立する市民」は、決して、英雄ではない。彼らもまたふつうの人間で、どこか、おとなりに自分と同様にふつうの人間なりのやり方で行なう「自立する市民」を感じとること、自分もまたことを行なつて来た人間ではないかと思う。実際にそうした隣人を彼らがもたなかったことはあつたし、また、もたないことでへこたれる人たちでは彼らは決してないだろう。しかし、そうした隣人——おとなりのふつうの人間を彼らはいつでも自分の可能性の世界のなかにふくみ込んでいて、それゆえに、彼らの

世界はおたがいのつながりにむかって積極的に開かれていた。いや、今も開かれている。

実際的なことを書いておこう。この本のもととなった『アサヒグラフ』の連載は、一九六九年六月から十二月、一九七〇年八月から十月、二回に分けて行なわれた。いつも同行したのはカメラマンの中平卓馬さんと記者の中西昭雄さんで、彼らもまた、ともに「自立する市民」、すくなくとも、そうあるうとした人たちではなかったかと思う。『アサヒグラフ』には私の文章は中平さんの写真とともに出たが、この本には、経費の理由その他でそれができないのは残念である。

一九七四年四月

目次

まえがき 1

八月、大阪に来てみなはれ〈反博協会〉 9

瓢鰻亭共和国の主〈瓢鰻亭通信発行者・前田俊彦氏〉 19

彼らにも言いわけができる時代のなかで〈島居重樹氏〉 27

日本中に起った人間の渦巻〈六・一五デモに集まった人びと〉 37

「熊本・一市民」の中の中国〈中国に木を植える会・畠田真一氏〉 47

ハッピーニングと地道〈札幌ベ平連〉と「北大ベ平連」 57

「自己決定権」という原理〈佐世保ベ平連〉 69

「六・一五現象」・ギター・人々〈フォーク・ゲリラ〉と市民たち 79

「明るい」農民のサムライたち〈北海道士別市の「ひろがり」〉 91

「一パーセント」の一人〈もののべなおき氏〉 101

その見事な一つの教科書〈野崎一家〉 111

「居つき」の活動家〈鈴木達夫氏と長崎反戦〉 123

「国家のたくらみ」に立向う〈家永訴訟支援市民の会・久能昭さん〉 133

ふみとどまった開拓民〈友田多喜雄さん〉 145

- 人間のすることをする人たち〈古川泰龍氏〉 159
- 泥だらけの日本人たち〈玉城素氏と「チョッパリの会」〉 171
- 「ジャテック」になる人びと〈日本脱走兵援助技術委員会〉 183
- 数学はどう反戦にかかわるか〈ベトスウコン〉の数学者たち 193
- 「人間」としての西洋〈哲学者・森有正氏〉 209
- ベトナムの微笑〈グエン・チ・ビン夫人〉 221
- 「自分は、個人はどうするのか」〈ひとりで始めた青年・小西誠氏〉 231
- KYODAI-TEKI NA AISATSU 〈フランツ・ショーマン氏〉 243
- 日本語を話すことより……〈エイジマ氏の一家と「アジア系アメリカ人行動委員会」〉 255
- 目の不正にガマンがならない〈飯沼二郎氏〉 267
- 「素人」を誇る弁護士〈角南俊輔氏〉 279
- 「あくまで面倒をみる」という思想と行動〈鈴木修三さん〉 291
- かつがない教育者〈無着成恭さん〉 303
- 「公害」という「差別」にとりくむ〈宇井純さん〉 315

八月、大阪に来てみなはれ

反博協会

「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）の運動の一つの原則は、ベトナム反戦の行動をやりた
い人が勝手にやるということである。

したがって、そこには、本部、支部などというものはない。日本を旅行していると、各地にさまざま
な「ベ平連」があるのでおどろく。私が知らないのもいくつもある。朝起きて、旅館で新聞をひら
く。すると、どこかの基地に「ベ平連」がデモをしたというふうな記事が出ている。聞いたことのな
い名前だ。メシを食おうと思って外に出る。どこかでフォーク・ソング、いや、プロテスト・ソング
つきで若者が募金をやっている。「ベ平連」だ。と思うと、機動隊と激突している「ベ平連」もいる。
考え方も多様なら、なかでやっている人々も種々雑多なら、行動もさまざまだ。

そして、「ベ平連」の人々の根本的な了解点は、たがいの行動の自主性の尊重で、自分は自分のや
っていることに自信と責任をもっている。しかし、同時に、他人のそれも認める——私は、これが、
「ベ平連」の運動の原動力だと思う。

自分たちで動く広場をつくる

ときどき、学生運動は楽だなと思うときがある。年齢はいっしょだ。考え方も似たりよったりだ。
身体力だって、まあ同じだろう。直結するのは簡単だ。大学のどこかヘビラでもはっておけばよ
い。毎日、学生は大学へ来るではないか。

「ベ平連」となると、どうだろう。まず年齢といこうか。私の知るかぎり、「ベ平連」のデモへの参加者は、三歳から七十八歳までだ。赤ん坊を抱いている人もいる。赤ん坊も、その場合、参加者だ。しかし、それはどうやら自由意思からではない。自由意思からだとすると——私はあるデモで、ヨチヨチ歩きの子がいた。デモ面白いかい、とたずねると、そうだと言う。また、来るかい、ときくと、来ると言う。年をたずねると、小さな手を出して、指が三本。これで、三歳の「ベ平連」デモ参加者ができ上がったわけだ。

この三歳から七十八歳までのデモ隊が、どのように進むか。いくらジグザグ行進が効果的だと言っても、リーダーが強制したりすると、心臓ハレツをおこす人もいるだろう。そんな人を、リーダーが、おまえはヒヨリミだときめつけることができるか。

職業でいこうか。学生（大・高・中・小学生、予備校生）、労働者（大企業、中企業、小企業、日雇労働者、組合のある会社の従業員、組合のない会社の従業員、ソバヤのデマエモチ、タクシートの運転手、ホテルのボーイ、電気メーターの検針員）、クズヤ、花屋、小説家、主婦、お嬢さん（は「職業」ではないのか）、お坊さん、牧師、新聞記者、評論家、大学の先生、幼稚園の先生、医者、コック、弁護士、俳優、失業者、あるいは、なんで食っているか他人はおろか本人にもよく分らぬ人……。おそらく、ケイサツ官と自エイ隊員を除く全職業（もと自エイ隊員はいる）の人間が同じデモのなかで歩く。

こんなややこしい連中（それは、まさに、「群集」と呼ぶべきものではないか。「自覚した群集」と

かたく言ってもよい）に何か連絡しようと思ったら、それはことだ。どこにも集会場はない。ということは、逆に、どこだって集会場になり得ることだ。いきおい、デモがかたちづくられる。それは、つまり、動く、行動する広場だ。私の考えでは、広場のない日本の都会では、こんなふうにして、自分で広場をつくって行くのがいちばんいいのではないか。広場は場所ではない。人間の運動であり、行動であると思う。

広場はみんなの心の中に……

なぜ、「ベ平連」のことを長々と書くのか。それは、「ベ平連」にかぎらず、日本のあちこちにそうしたたんなる場所ではない広場——ひとりひとりの人間の運動、行動が有機的に結びついて作り出す広場がかたちづくられているからだ。これは、万国博につくられるという、どこからか金が出て、わたしたち日本の市民にどのような相談もなしにつくられるという「お祭広場」ではない。

お金がないから、その広場はもつと見すばらしい広場だろう。広場づくりの専門家などいないから、不細工で、あっちこちに穴ボコのあいている広場だろう。しかし、すくなくとも、それは、「私たちの広場」だ。その誰かがお仕着せにつくってくれた借りものの広場ではなく、私たち自身がつくり出した、ことだけははっきりしている。

広場をかたちづくるのは私たちが、方法はなにもデモだけではない。集会在それをかたちづくる

場合もあるだろう。数人のグループの日常的な地道な行動が作り出す場合もある。あるいは、たったひとりの人間が、自分自身のなかに広場をうちたてる場合だってあるかも知れない。いや、そうした広場は、政治の広場づくりの専門家がつくった大きな、ただ大きなだけを誇る、ただ、動員した人、投票した人間の数だけを誇る広場とは根本的にちがって、まず、人間ひとりひとりが自分自身のなかにかたちづくることから始められるのだろう。

日本を歩いてみて私が感じる、いや、感動するのは、そうした広場があちこちにあること、そのたしかなりどころである。広場に集まる人々が叫ぶのは、ベトナム反戦だけでも安保破棄だけでも沖縄のことだけでもない。もっといろいろな問題があったし、今もあるし、これからもありつづけるだろう。たとえば、巨大な数の人間のいのちの軽視を問題にする広場の声もあれば、一人の人間のいのちをただひたすらに守り抜こうとする人間が集まる広場もある。

私は、これから一年、日本を歩いて、その広場をひとつひとつ訪れてみようと思う。申しおくれってしまったが、広場は都会にだけあるものではない。大学にも工場にも農村にも、漁村にもある。いや、くり返して言うが、まず、人々の心、この文章を読む人たちをふくめて人々の心のなかにある。

「反博」を叫び出した広場があった。むくつけき男どもがあつまってガヤガヤがなりたて、きたないアパートの一室を占領して、そんな計画を叫び出した。

言い出しっぺは「南大阪ベ平連」だった。これは「ベ平連」のなかでもまったく「ベ平連」的な

存在であって、いつできたのか忘れてしまったが、私が気がついたときには、あつちにデモし、こつちに集会を開き、あつちで人があきれるほどアホなことをどなりたて、こつちで人々が成功してナミダを流すようなことをやっていた。

たとえば、「北摂ベ平連」、「関西ベ平連」などといっしょに大阪国際空港そばの新明和工業にデモし、何度もデモし、軍需生産をやめたいと経営者に言わせたり、反戦文化祭とかなんとか、とにかくそんな名前の大きな「祭典」を自分たちだけで勝手にやり（三百人集まったそうだ。それを、三百人しか集まらなかった、と見る見方をすることも、三百人も集まったという見方をすることもできる）、そのうち、対話集会をやり出し、はじめは天王寺公園、今ではアベノ橋の地下街で人がきいていようといまいとベトナム反戦を論じ、安保を論じ、沖縄を論じ、人が集まらないとプロテスト・ソングを歌い、それでもなお集まらないとサクラがケンカをして集め、その対話集会は、「関西ベ平連」など大阪各地の「ベ平連」といっしょになって「梅田大学」をやった。

この「梅田大学」ほど、広場はたんなる場所ではないことを示しているものはないだろう。広場が場所でないなら、大学も場所ではないはずだ。梅田の地下街の一角に人々がすわり込んで「大学」をつくり出し、一日、反戦、安保……もろもろを論じた。学生諸君、見ならいたまえ。大学は場所ではない。